2010年11月25日

日本エイズ学会学術集会・総会

一般演題（ポスター）

女子少年院におけるHIV抗体検査の必要性

――薬物、性などの様々な問題を抱える非行少年への支援の観点から――

永田　憲史

（関西大学法学部准教授）

報告要旨　2～3頁

スライド　4～31頁

報告要旨

【目的】　女子少年院入院者は、HIV の感染リスクが高く、治療や予防教育を困難にする様々な問題を抱えている。抗体検査・治療・予防教育に関して手厚い支援が必要であることを明らかにしたい。

【事例：平成 21 年 4 月 7 日大阪家庭裁判所堺支部決定】　14 歳（中学 3 年生）の女子少年が成人男性に勧められて覚せい剤を静脈注射により使用。小学 5 年生時に両親離婚。親権者である母親がアルコール依存で入退院を繰り返してきたため、放任状態で育つ。小学校高学年以降、問題行動と非行を累行。処分決定時には妊娠中で出産予定。医療少年院送致の決定。

【実態】　女子少年院入院者は自己肯定感が乏しい上、様々な問題を抱えている。〔薬物〕覚せい剤の使用経験率 24%。自己申告であるため、実際の使用経験はより多いと推測される。〔性〕性経験あり 92%、人工妊娠中絶経験率 20%。無防備な性行為が窺われる。〔家族関係〕保護者が実父母 30%、実母のみ 43%。家庭が崩壊していることも多く、性に関する教育が家庭で行われにくい。〔児童虐待〕約半数が経験。〔経済状態〕実母のみが保護者の場合に実母は 25%が無職。仮退院後の生活に支障が出やすい。〔知的能力〕知能指数の平均は 80 台、中央値 90。社会的ス

キルが低いことと相まって、社会適応に支障が出やすい。抗体検査の同意や治療・予防教育にも影響する。

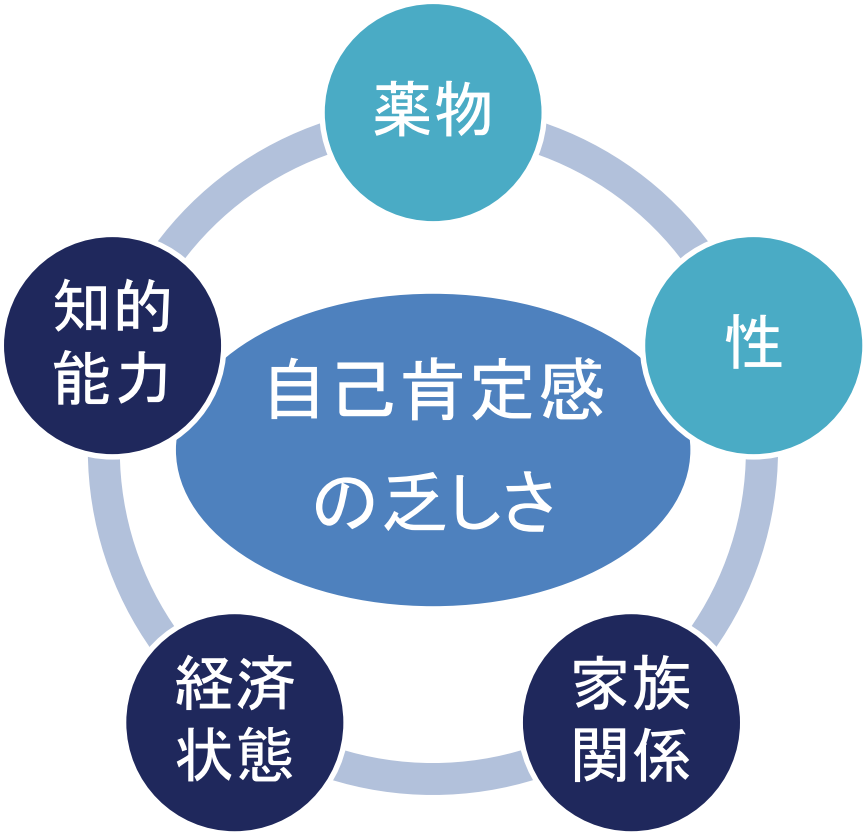
【分析】　女子少年院入院者は、HIV の感染リスクが高い。しかも、治療や予防教育を困難にする様々な問題を抱えているため、少年院仮退院後に社会内で抗体検査・治療・予防教育を受ける機会が乏しい。行動変容を働きかける時間や機会に恵まれている少年院入院中に抗体検査・治療・予防教育を受ける機会を提供すべきである。

女子少年院における HIV抗体検査の必要性

薬物、性などの
様々な問題を抱える非行少年への支援の観点から

関西大学法学部准教授　永田憲史

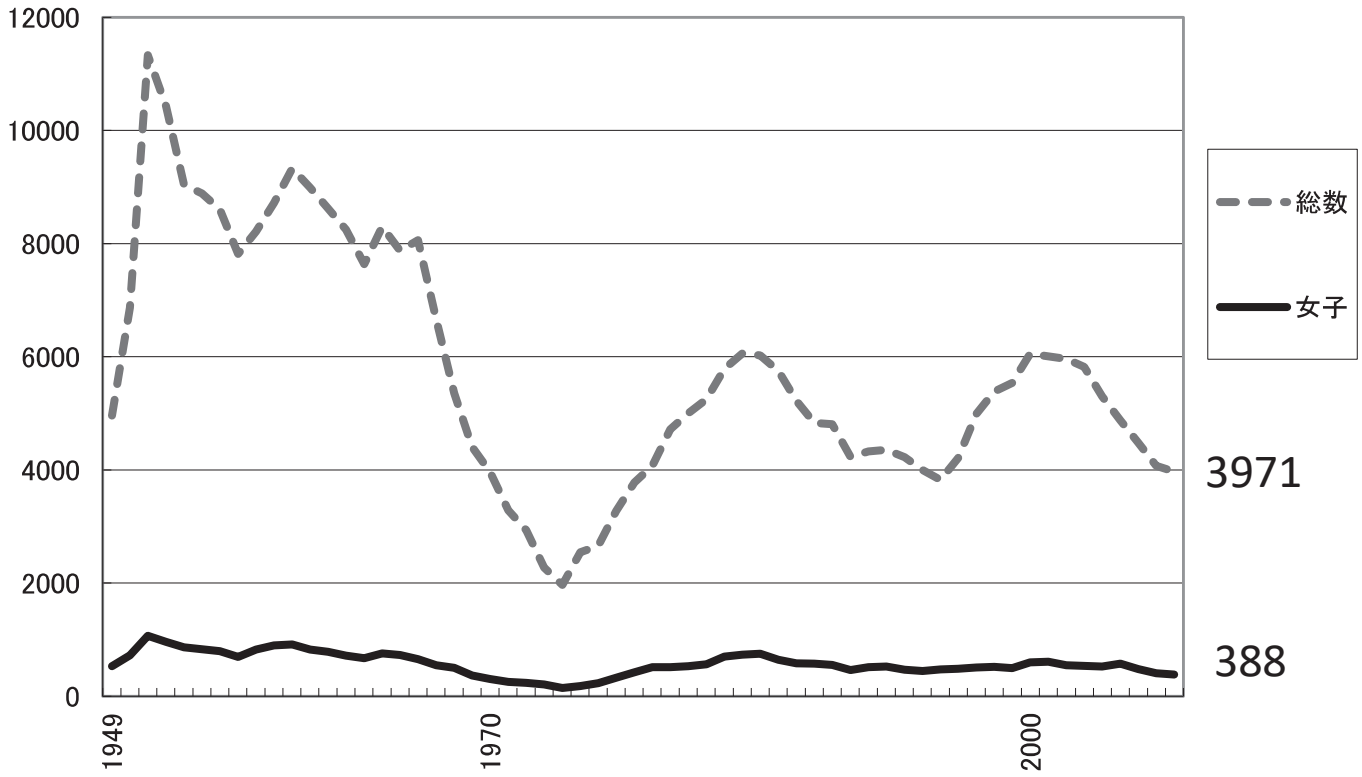
女子少年院入院者の抱える問題



①感染リスクが高い因子
が複数存在する。

②治療や予防教育を
困難にする因子
が複数存在する。
↓
手厚い支援が必要

少年院入院者数の推移



法務省法務総合研究所編:
平成21年版犯罪白書. 東京, 法務省, 2009より作成

女子少年院入院者の例

平成21年4月7日　大阪家庭裁判所堺支部決定
（家庭裁判月報61巻10号83頁）
覚せい剤取締法違反保護事件

【年齢】 14歳　（中学3年生）

【性別】 女性

【非行の内容】
成人男性から勧められて、ホテル内の客室で覚せい剤（フェニルメチルアミノプロパンの塩類）若干量を含有する水溶液を注射してもらい、覚せい剤を使用した。

女子少年院入院者の例

【家族関係】
小学5年生時に両親が離婚。
母親が親権者。姉が1人。
母親はアルコール依存で入退院を繰り返す。
放任状態で育つ。 ……ネグレクトの疑い

【非行歴】
小学校高学年時に怠学、喫煙、家出。
中学1年生時にシンナー吸引、家出、売春など。
中学2年生時以降、覚せい剤使用。

女子少年院入院者の例

【身体状況】
処分決定時に妊娠中。出産の予定。
妊娠の事実を知りつつ、覚せい剤を使用。

【性格】（家庭裁判所の調査による）
精神的に幼稚で、現実認識が甘い。
判断力や自律性に乏しい。
やりたいと思ったことをすぐに言動に移しやすい。
計画的に物事に取り組む構えがない。
その場を楽しく過ごせればよい。
根拠の乏しい楽観的な見通しに終始しやすく、危機意識が芽生えにくい。

女子少年院入院者の例

【処分の内容】

医療少年院送致。

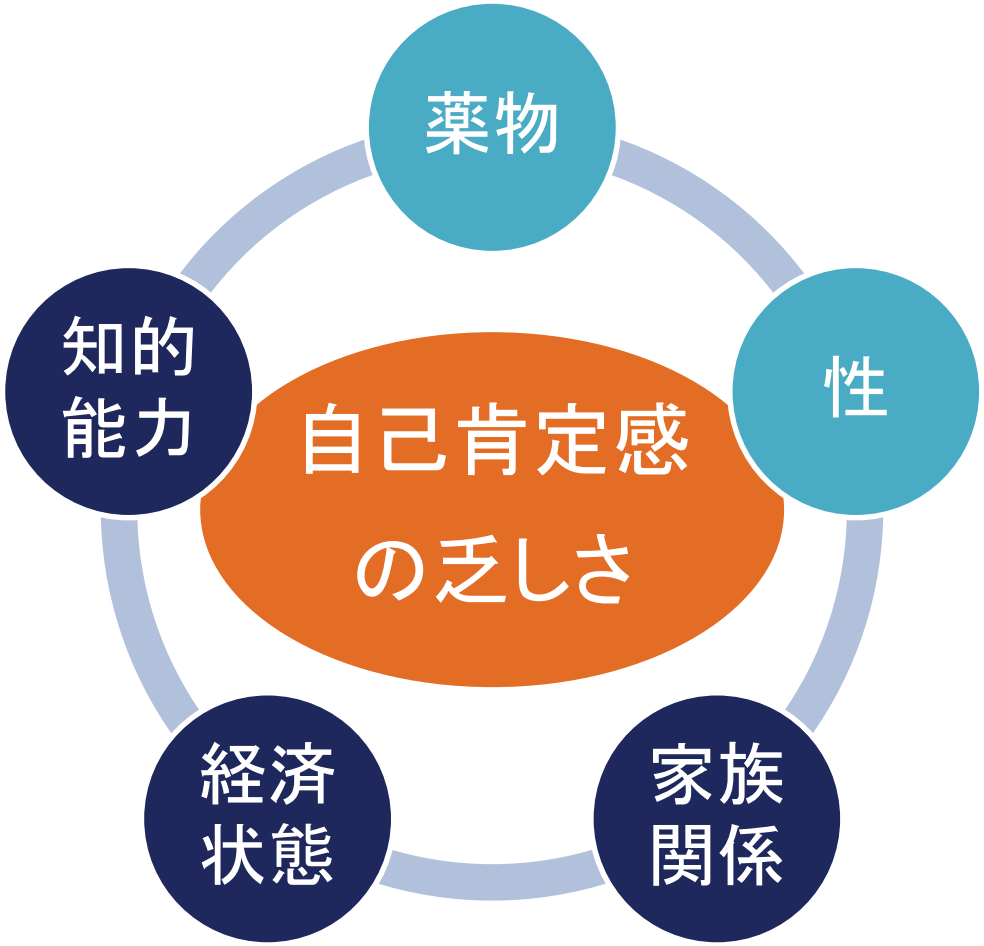
出産後、初等少年院へ移送。

長期処遇（収容期間約1年）。

《初等少年院》

おおむね12歳以上16歳未満の犯罪傾向の進んでいない少年を収容する少年院。

女子少年院入院者の抱える問題



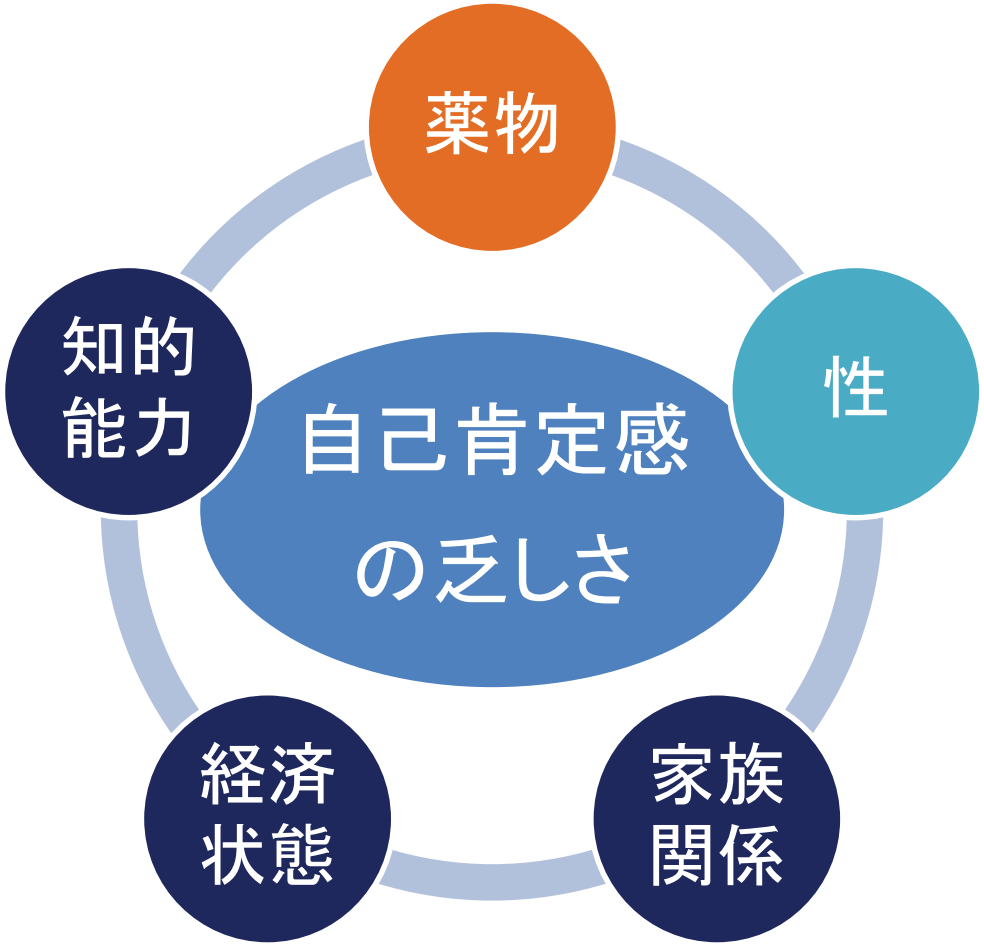
女子少年院入院者の傾向

①自己統制力の未熟さ
②規範意識の低さ
③愛情欲求不満の高さ
④共感性・協調性の乏しさ

（高村賀永子: 交野女子学院における処遇の現状と課題. 犯罪と非行 162: 162-172, 2009）

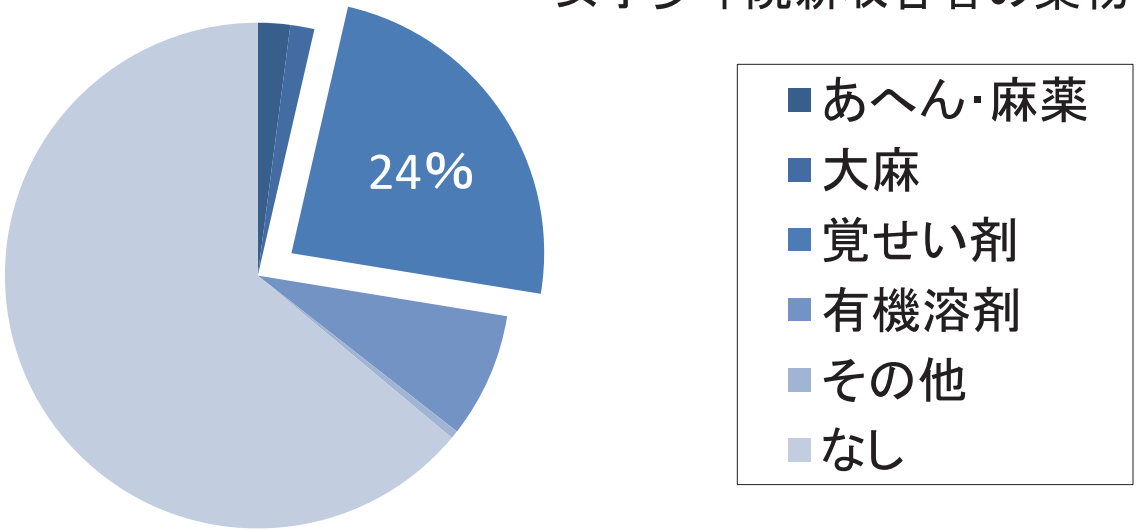
→親の養育態度に問題があることが多い。
→その結果としての自己肯定感の乏しさが
様々な問題に悪い影響を及ぼしている。

女子少年院入院者の抱える問題



薬物の問題

女子少年院新収容者の薬物等使用関係



(2008)

法務省法務大臣官房司法法制調査部調査統計課:
矯正統計年報　第110. 東京, 法務省, 2009より作成

薬物の問題

覚せい剤の使用経験率は 24.0%

……覚せい剤取締法違反 21.9%（2008）

年長少年（18、19歳）の使用経験率は高い

……覚せい剤取締法違反 38.3%（2008）

薬物の問題

使用経験は自己申告に基づく

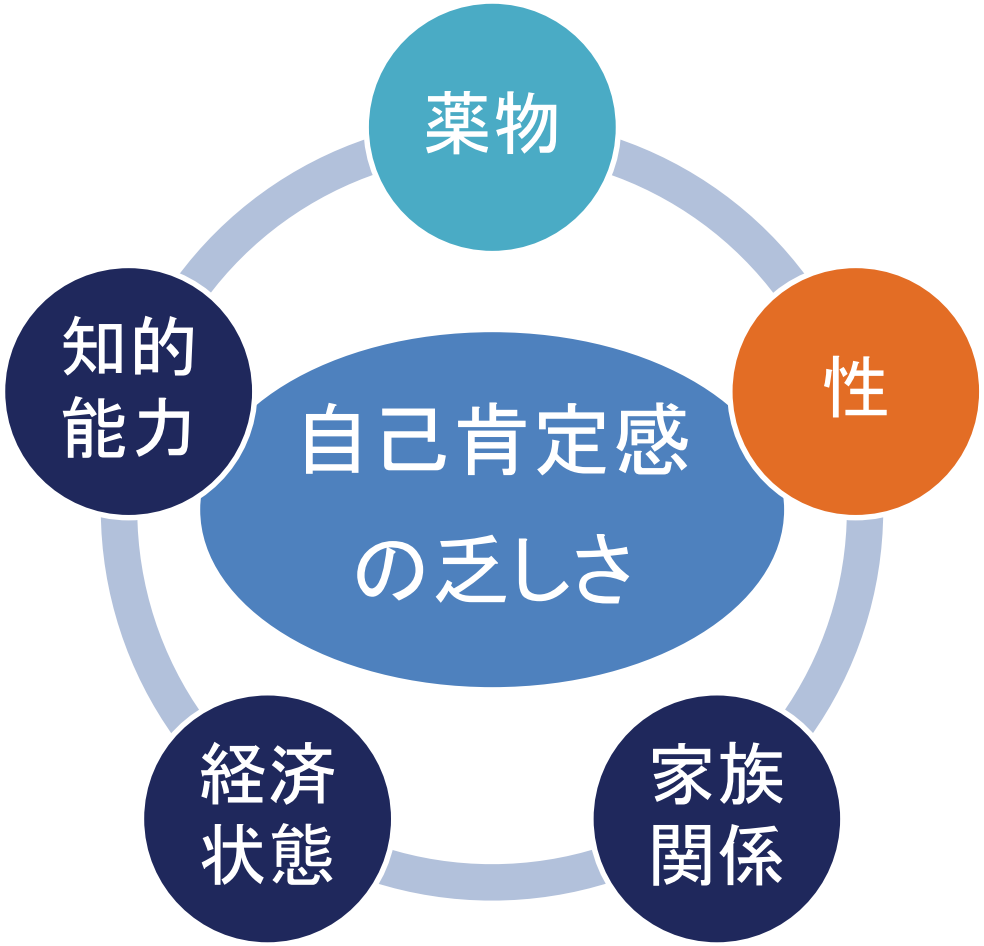
←実際の使用経験はより多いと推測される

（少年院における聞き取り調査より）

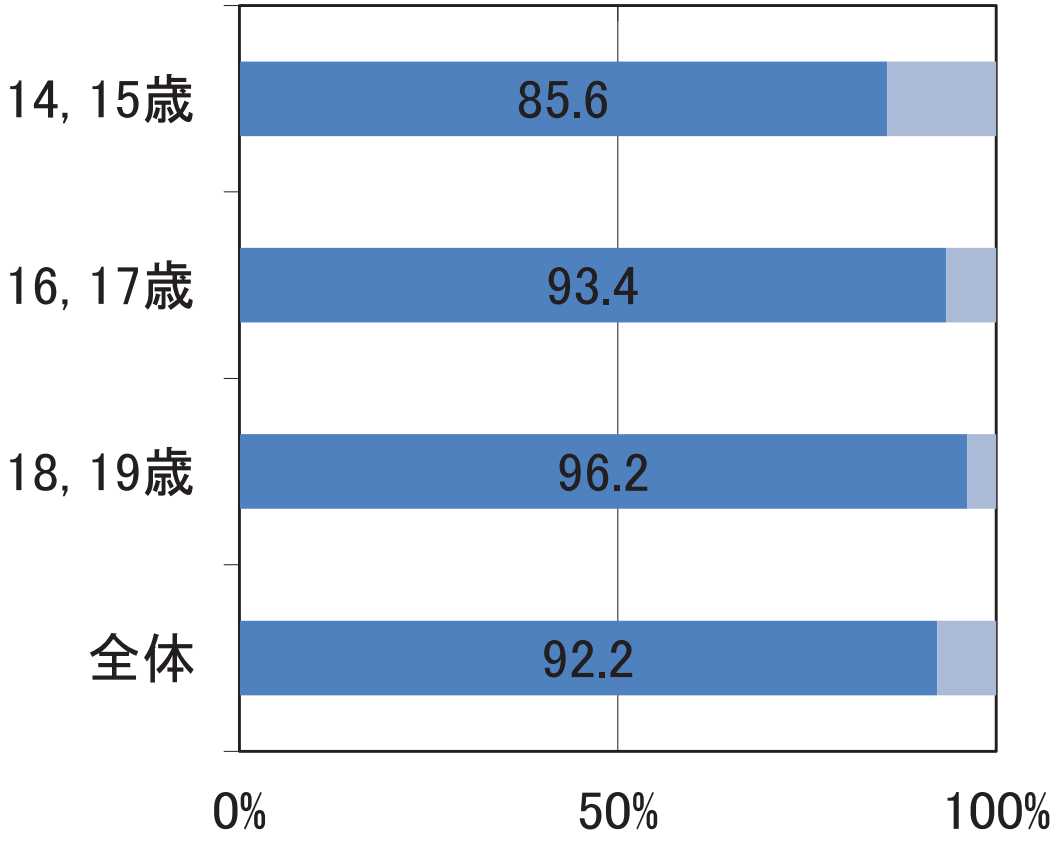
使用方法は注射器によるものが大半

……HIV感染のリスクが高い

女子少年院入院者の抱える問題



性の問題



少年鑑別所収容女子
少年の入所前の行動
調査

■ 性経験あり
■ 性経験なし

(1994)

法務省法務総合研究所編:
平成7年版犯罪白書. 東京, 法務省, 1995より作成

性の問題

・このデータは、少年院に入院する少年だけを対象としていないため、非行がそれほど進んでいない少年も含んでいる。

→にもかかわらず、性経験率は極めて高い。

《少年鑑別所》

家庭裁判所が少年院送致などの処分を判断するまで少年を収容する施設であり、3/4の少年は社会へ戻る。

・近時、データの公表がなく、データが古い。

……状況は変わらないとされる

（少年院における聞き取り調査より）

↓

非行少年、特に女子少年に性経験は一般的

性の問題

女子少年院収容者の2割は人工妊娠中絶の経験を有する。

（法務省法務総合研究所編: 平成4年版犯罪白書. 東京, 法務省, 1992）

……この傾向は現在も見受けられる

（少年院における聞き取り調査より）

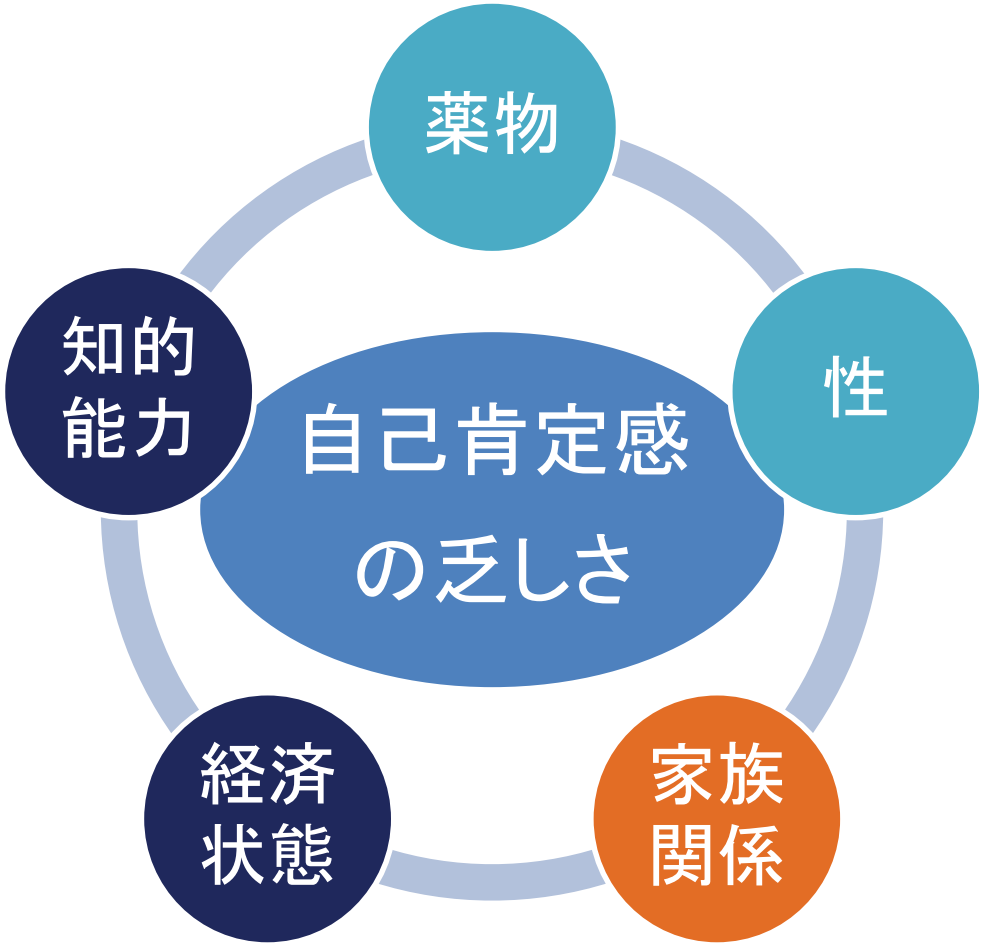
↓

無防備な性行為が推測される。

……性被害、薬物濫用なども関係している

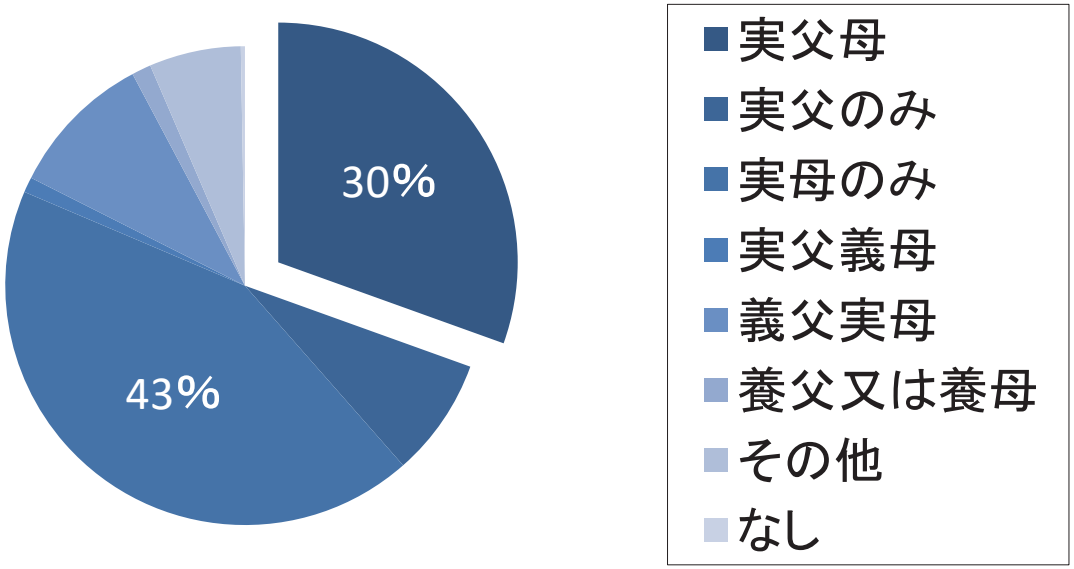
→HIV感染のリスクが高い

女子少年院入院者の抱える問題



家族関係の問題

少年院新収容者の保護者



(2008)

法務省法務大臣官房司法法制調査部調査統計課:
矯正統計年報　第110. 東京, 法務省, 2009より作成

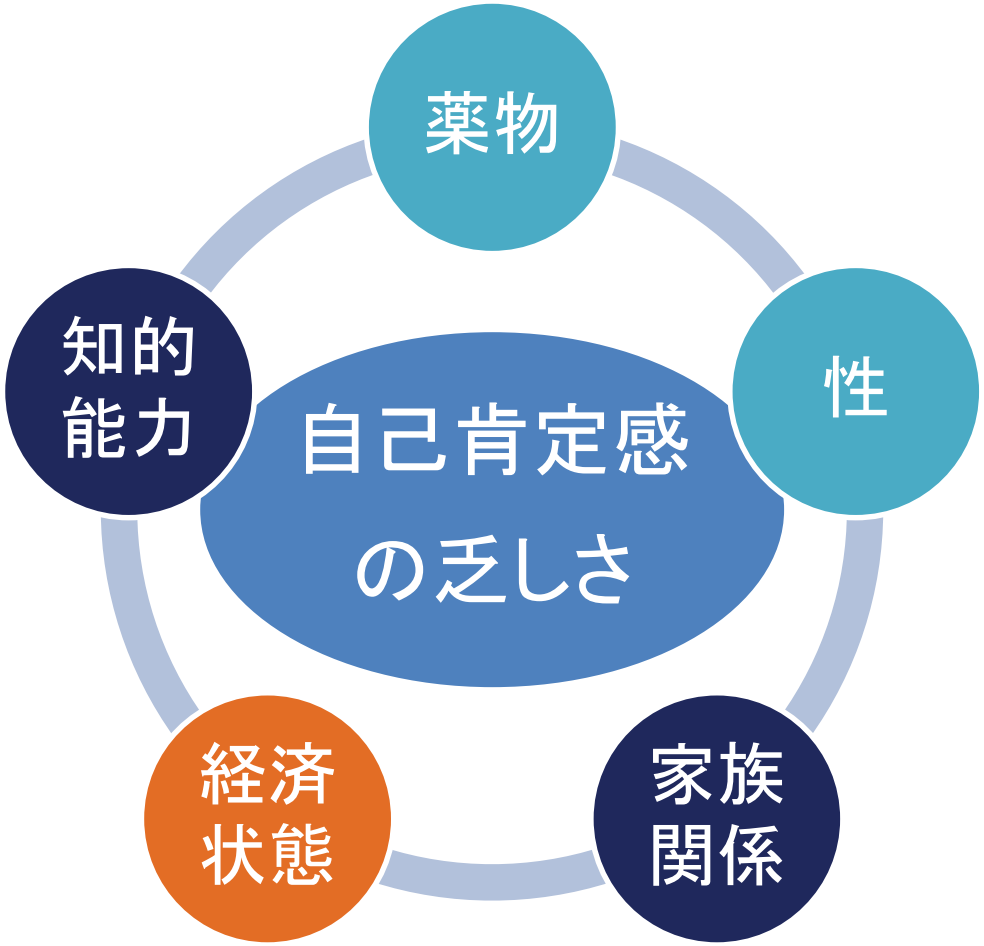
家族関係の問題

保護者が実父母であるのは30%に留まる
……家庭が崩壊していることも少なくない

家族からの加害行為の経験率は79.5%
（板垣嗣廣, 松田美智子, 栗栖素子: 少年院在院者に対する被害経験のアンケート調査(児童虐待に関する研究(第1報告)). 法務総合研究所研究部報告11: 1-250, 2001）

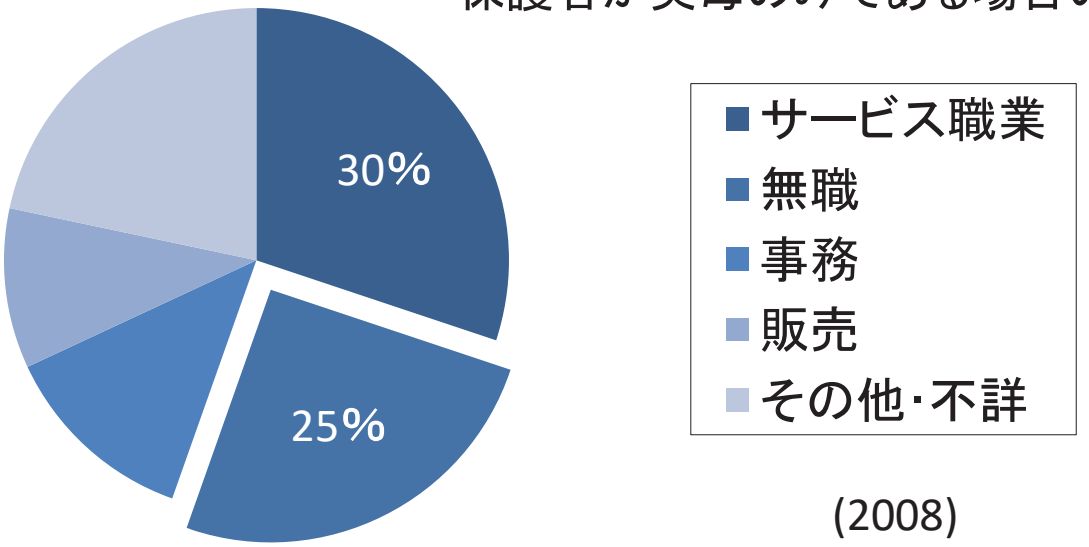
→性に関する教育が家庭で行われにくい
仮退院後の生活にも支障

女子少年院入院者の抱える問題



経済状態の問題

保護者が実母のみである場合の実母の職業



(2008)

法務省法務大臣官房司法法制調査部調査統計課:
矯正統計年報　第110. 東京, 法務省, 2009より作成

経済状態の問題

実母のみが保護者の25%は実母が無職

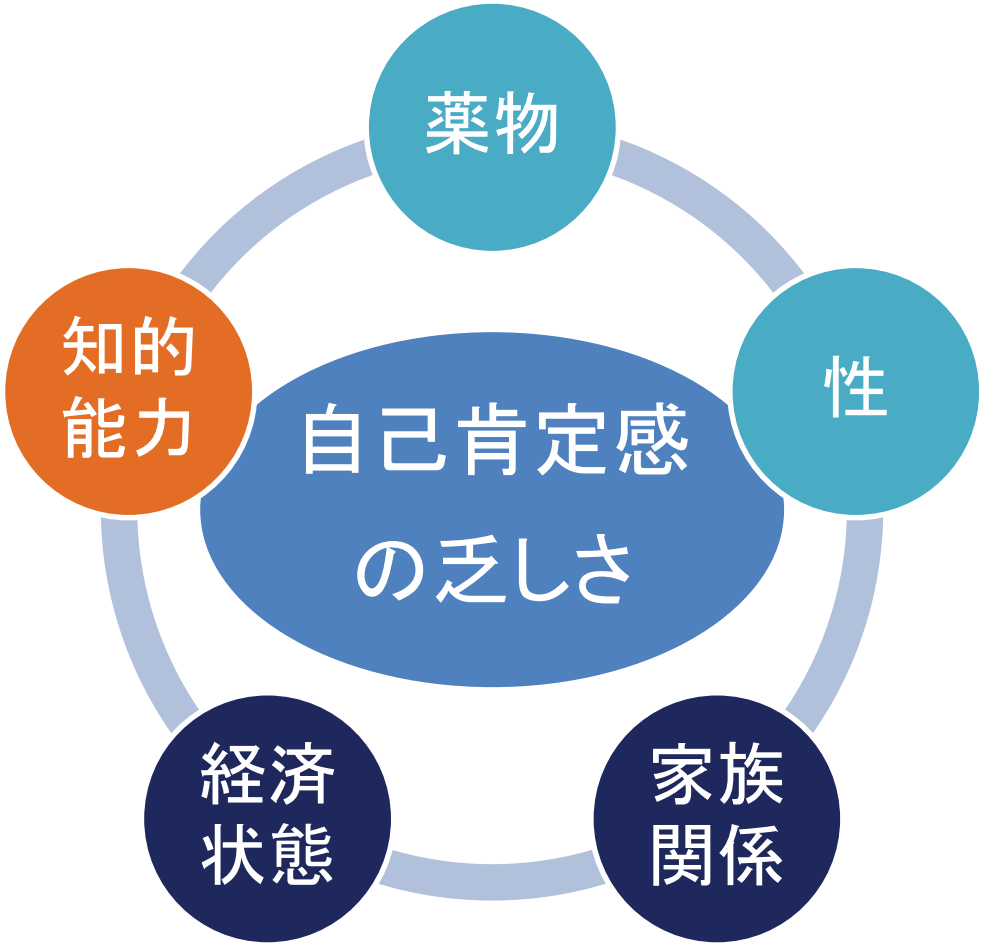
……非正規雇用等も多く、

経済状態は一般によくない

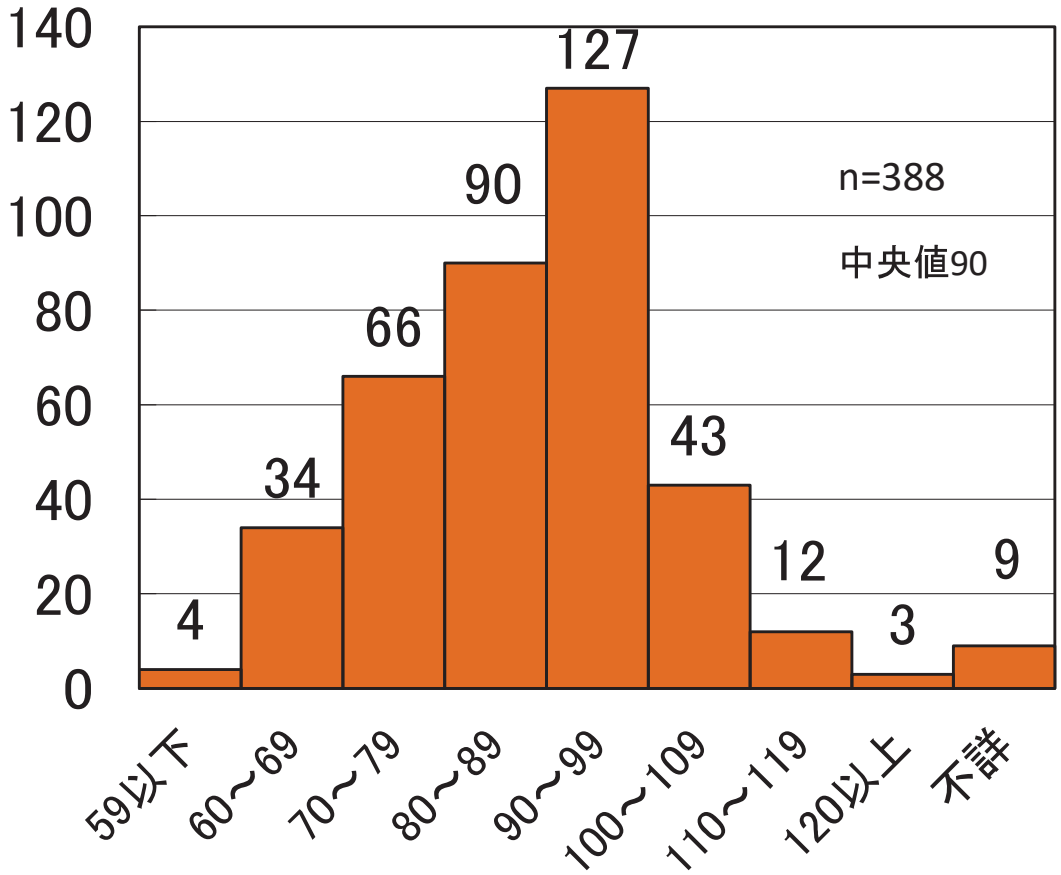
→性に関する教育が家庭で行われにくい

仮退院後の生活にも支障

女子少年院入院者の抱える問題



知的能力の問題



女子少年院
新収容者の
知能指数

（2008）

法務省法務大臣官房司法法制調査部調査統計課：
矯正統計年報　第110. 東京, 法務省, 2009より作成

知的能力の問題

知的障害と判断されているのは10人に留まる。

（法務省法務大臣官房司法法制調査部調査統計課
: 矯正統計年報　第110. 東京, 法務省, 2009）

しかし、多くの女子少年院入院者が
知的能力にやや問題を抱えている。

→社会的スキルが低いことと相まって
社会適応に支障
……検査の同意、予防教育や治療に影響

女子少年院で抗体検査を行う必要性

- 薬物濫用や無防備な性行為などのため、女子少年院入院者の感染リスクは高い。
- 女子少年院入院者は種々の問題を抱えているため、少年院仮退院後に社会内で検査・治療・予防教育を受ける機会が乏しい。
- 社会内の検査とは異なり、少年院入院の間、行動変容を働きかける時間や機会が存在する。

↓

少年院入院という絶好の機会を逃すべきではない

「福祉の最後の砦」化する
刑務所・少年院

犯罪者・非行少年に検査・治療・予防教育を提供する必要性は高い。

刑務所や少年院が「福祉の最後の砦」化

……施設収容中は検査を実施し、
治療・予防教育を開始する最後の機会